続・庭の番人

別れの前「子ども」

土橋　光子

四月三日（金）

今年は桜の開花が早く、もう満開でチラホラと散りはじめました。すぐ昼時です。外に子どもの声がきこえ、大急ぎで出ていって見ます。女の子が二人、かがみこんで桜の花びらを拾っていました。器はもみじのような小さな手の平です。そっとのぞきますと、

子「あっ！　おばあちゃん、昨日ね、お花が舞っていたの、つかもうと思ったら逃げちゃった。」

私「そう、それで今日は拾っているのね！」

子「うん！　さくら水つくるの、さくらごはんも！」

私「私もお手伝いさせて、今朝ちょっと掃いたので少ないでしょ！」

拾いはじめました。お互いの手の平を開いて見せあいます。私の手の平から子どもの手の平へ、花びらは移っていきます。五辨の花を拾い上げて、花粉をつけた雄しべを見つめて、

「あら、男の子ばかりだわ！」と一人言を言うと、二人は手を休めて覗きこんできました。

二人「どれ、どれ！」
私「あのね。この黄色い粉をつけてるの全部男の子、ほんとは真中に女の子が一人居るの。きっと、ヒヨドリさんが女の子食べちゃったのね、このふくらんだところに甘いおいしい蜜があるのよ」
と別の一輪を私が口に含んで喰べてみせると、二人の目はまん丸になって、私の口もとをじっと見つめています。一瞬、時が止まりました。
私「小鳥さんて、おいしいものがあるところをよく知っているのね！　お庭の中に沢山おちてるから、どうぞ！」とさそうと、急に、
子「あのね、この子のぞみちゃん、私なつきってゆうの。みんなはなっちゃんとか、なつきちゃんて言うの！」
庭へどうぞと言われた時、名のらなければと咄嗟に自分達を紹介してくれるとは……扨て、私も名のらなければと、「私、桜のおばあちゃん」。戸口に立って「どうぞ」と手を延べると、何の不思議も感ぜずに、そう思ったのか、名前など、どうでもよかったのでしょうか？　うなずくと、そっと頭から入って来ました。
庭の苔の上に散っている桜花は、美しい薄紅色をして、しんと静かです。なっちゃんは緑の苔をそっとなでながら、
なつき「いいきもちだね。やわらかくて、フワフワだね、これいっぱいにして、石も木もみんなどかして、ここへねころんだらいいね！」
そして、マンガの主人公たちの名前が口を突いて次ぎ次ぎ出てきます。彼等に願って緑のジュータンにしてもらいたいのでしょうか！　二人が拾いはじめたので私は家に入り、丁度よさそうな透明のパックコップを三個持って来て、「これ使えますか？」とそっと出すと、早速、手一杯の桜の花びらを入れ、拾いたして一杯にすると、帰っていきました。
「さよなら、気をつけてね！」

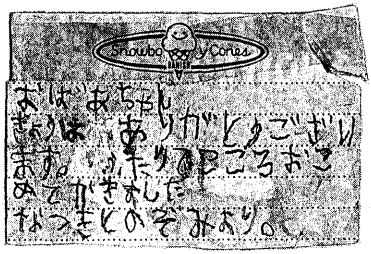
二人は左右を見て手をあげ、道を渡り、通りを走って行きました。家に入るのを見とどけて、戸をしめて……。

昼食です。仕度を終わってテーブルを囲みましたが、子どもの声を聞いて、娘が外をのぞいて見ました。何かあったようです。

娘「かあさん、早く外に出て見て、右のはこべの中！」

私は急いで外に出て見ました、そこに何を発見したとお思いですか。美しい三つのパック。水をはり、さくらの花びらを浮かし、緑のはこべ、紅椿の花、ピンクの八重つつじ。この組み合わせが二個。残りの一個には、水をはり、桜を入れ、椿を一輪浮べその外側に又桜の花、雄しべに囲まれて緑の葉っぱが一枚、すっとたててありました。そしてテープで手紙がとめてあります。

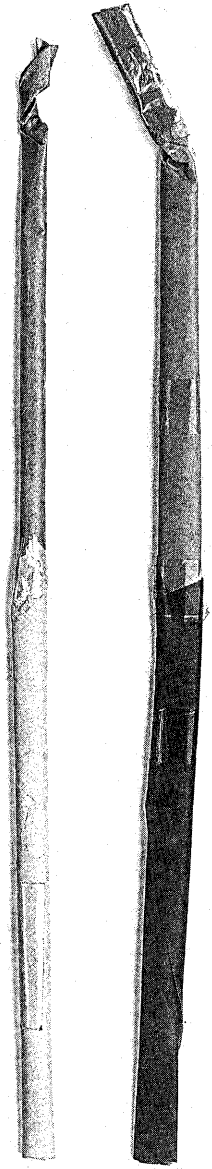
こちらも二人でその手紙をのぞきこんで読みました。



娘「どこで書いたかよくわかるわね！」と笑っていました。

コンクリートの上でごりごり書いたのでしょう、一字一字にゴリゴリがでていて、文面のように、ほんとうに心が伝わってきます。

我が家の昼食のテーブルには、思わぬ美しい贈り物が仲間入りして、のぞみちゃんと、なつきちゃんも一緒に食事をしているような気分になりました。その後、折り紙を二色つなげてまるめた棒が二本、



同じ場所に置いてあります。お箸でしょうか！勿論、私もお礼をしました。このことによって三人の糸が何時まで続くのでしょう！

午後三時、そろそろ戸を開けて見ましょうか。いいえ娘が外出から帰るのを待ちましょう。でも、今日はもう終わりかもしれませんね。そんなことを思いながら、はこべのところに苺のパックを二つ、中に手紙を入れました。

このパックもつかってください。

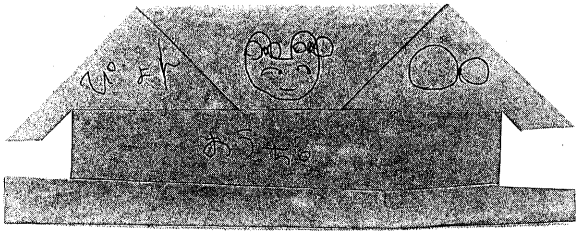
なつきちゃん！　　さくらの

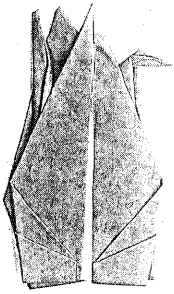
のぞみちゃん！　　おばあちゃんより

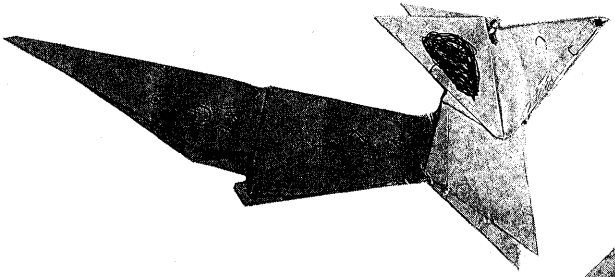
四時頃でした。言葉にならないクッ！クッ！と言う声に続いて、バタバタッと子どもの駆けていく足音を聞いて、そわそわと戸のところに出ていきました。はこべの上に沢山の贈り物を発見したのです。パック一杯に水を張り、桜、椿、山吹、薄緑の若葉、自分の家の庭のもの、道に散っている花びら、隣家の垣根からそっといただいたもの等で満たした二個のパックと折り紙で折った鶴、花、家、きたきつねに、絵や字が書いてありました。必ず持ちに来てくれると信じて置いてあるのです。

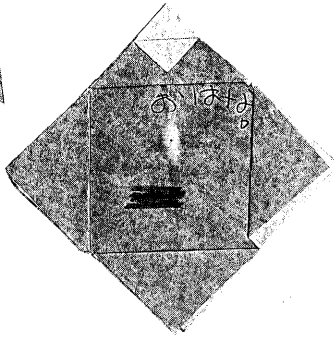
「何日間、生かしておけるかしら？」と花のパックは涼しい洗面所の棚に飾りました。

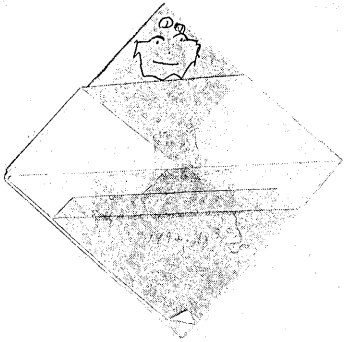
折り紙の贈り物には、そっと日付を書き込んでお











きました。

三十分後、通りを覗いて見ますと、まだ声がします。手を後に組んで、声の方へそっと歩いていきました。三人が路にうずくまって、熱心に何か画いています。「ワッ！」と声を出します。近づくのを知っていたように二人と小さい妹さんが、ニッと笑いながら顔を上げました。

のぞみ「あのね！　あのね！　なっちゃん　おひっこしなの！」

私「えっ！　いっちゃうの？　どこへ？」

なつき「あたらしいおうちできたの。おとうさんがたてたの！」
のぞみ「あのね、なっちゃんのおとうさん、だいくさんなの！」
なつき「がっこうにいくときひっこすの！」
私「じゃ、がっこうべつべつなの！」
と、つい当たり前のことを聞いてしまいました。のぞみちゃんの気持ちが痛い程、伝わってきたのです。二人は同時に、「うん！」とうなずいていました。
なつき「でもね、なつやすみにはあそびにくるよ」
四人の間に、ちょっと沈黙の時が流れました。私の心の中で、何か言ってあげなければと声がするのですが、咄嗟に、この時にふさわしい言葉がみつかりません。しばらく三人を見つめていて、やっと
「今日は、とても楽しかったわ、ありがとう！　二人とも元気で一年生になってね！」
引っ越していくなっちゃん、残るのぞみちゃん、妹さんと私を加えて、春の一日はようやく暮れはじめました。華やいだ後のもの淋しい夕暮れです。

四月六日

のぞみちゃんは妹さんをお供に連れて、お母さんと学校へ往きました。なっちゃんも新しい土地で新しい友達を見つけて、世田谷の路地で遊んだ続きをはじめることでしょう。
ガクを残して散りはじめた桜吹雪きの中を新一年生が何組か通っていきました。
「なっちゃん！　のぞみちゃんは元気です。妹さんもお母さんの自転車に乗せてもらって幼稚園に通いはじめました！」
今年も小さな庭の桜の木の周りで、新しい交わりが始まろうとしています。会ったり別れたりしながら！　平和な年になりますようにとあつい祈りをこめてそっと眼をつむりました。

（元・武蔵野相愛幼稚園）